

■手塚治虫 「漫画天文学」(1957)、「ぼくはマンガ家」(1969)

1. 漫画天文学

寡聞にして編者は実物を知らないが、「漫画天文学」の表紙に描かれているのは電気科学館のプラネタリウムであり、この表紙絵は電気科学館50周年記念講演会の際に手塚治虫氏(1928-1989)より贈られた色紙に描かれているものと同一である。



「漫画天文学」の表紙絵となったプラネタリウム

2. ぼくはマンガ家

手塚治虫の自伝である。初版は1969年というから41歳の頃で、その後、1979年、2000年と出版社を改めて再版、再々版された。

この中に「天文学入門」という章があり、次のような書き出しで始まっている。

ぼくは、芝居と同じように天文学も大好きだった。大阪の四ツ橋に電気科学館があり、そこに東洋で最初という、ツァイス社製のプラネタリウムがはいった。もちろん、ぼくは日参組であった。鉄壱鈴の化物のような偉容は、ぼくのさまざまな空想をかきたて、その中にはいると、きまって、エルガー作曲の「威風堂々」というマーチが流れており、はじめは、それが、プラネタリウムの曲かと思ひこんでいた。原田三夫氏著「子供の天文学」という本にお目にかかったのも、その書店でである。

それに続いて、プラネタリウムを自作した顛末が記されている。紙箱に火箸で穴をあけ、中に裸電球を入れ、部屋の明かりを消し、天井に映し出したという。お菓子につられてきた友達は正直な観客だったようで、お菓子をほおぼる音がするかと思いきや寝入ってしまうなどさんざんだった。おまけに、天井にミミズが這っていたと感想を述べる。螺旋状に巻かれていた電球のコイルがピンホールを通して天井に拡大投影されていたのであった。

この時の友達の一人は石原時計店社長の石原実さんだったようで、あるテレビのインタビューでこの自作プラネタリウムを見せられた思い出を話していた。